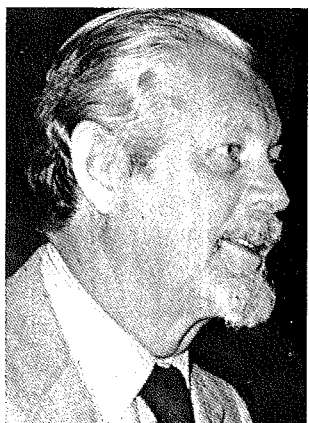




モーリシャスを地区内にもつホスト地区第920地区のガバナー、タンザニアのアンデイ・シャンデイ君



1年以内に第2回アフリカ親善会議の開催をと提案する南アフリカのデニス・ロイド君



南部アフリカの代表団リーダーとして参加したナンビア出身の第935地区ガバナー H. バーカー君

善意の実験

ポーマー RI 会長主催の第1回親善会議が昨年11月27日～12月1日インド洋上のモーリシャス島で開かれた。全アフリカのロータリアンが初めて一堂に会する機会を提供したこの会議は、それだけでも歴史的な意義あるものと評価されよう。

ロータリアン誌3月号より転載

ともに歩こう ともに語ろう 地上の人々よ
そのとき、まさにそのとき 平和は到るべし

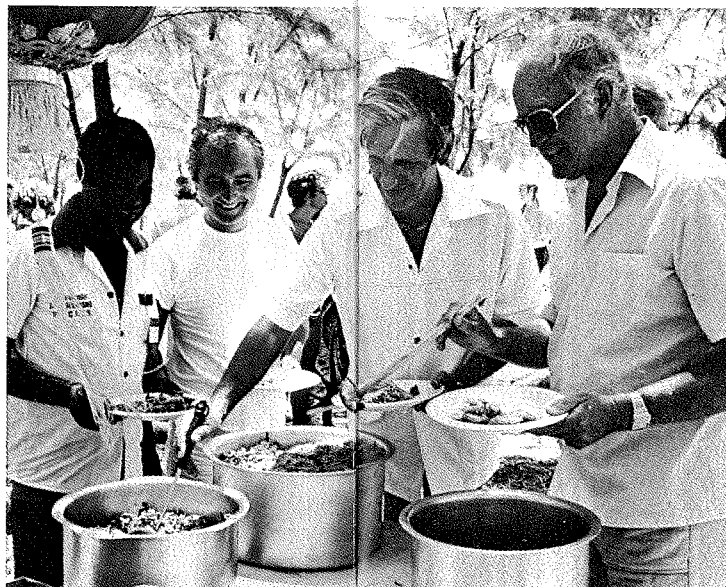
ポーマー RI 会長は、古代のこの諺にしたがって大胆な善意の実験をおこなった。インド洋上に浮かぶ小さな島モーリシャスで、第1回親善会議 (Conference of goodwill) を招集したのである。これは率直な話し合いによって、積年にわたる不信と誤解の壁を乗り越えようとする初めての試みであった。

この実験には、人種、皮膚の色、信仰の相違を越えて、アフリカ20カ国から300人のロータリアンが集まった。人種、文化、言語、服装、そしてまた社会的宗教的背景を異にし、さらにまた政治的意見の大きく食い違う彼らが、ロー

⇨
海岸で開かれたパーティの料理はモーリシャスのロータリアン夫人が、参加者の母国料理をあれこれと考へてつくったものごちそうにあずかる参加者の顔も期待に満ちているようだ。左よりキンシャサのM. ナゴイ、フランス系のモーリシャス・ロータリアン2人、南アフリカ出身の元 RI 理事 G. バレンタインの諸君

5頁写真

会場となったマハトマ・ガンジー研究所にポーマー会長より日時計が贈られた。左よりモーリシャス外務・観光大臣H. ウォルター、元ガバナーM. ラゲス、モーリシャス首相サー・ラムゴーラン、E. マンスフィールド牧師、ポーマー会長



モーリシャス親善会議



ピーター リンチ=シュルツ

タリーという偉大な国際的大家族の一員としてポーマー会長の呼びかけに応えたのである。

会議は、モカ (Moka) のマハトマ・ガンジー研究所の新ホールで3日間にわたって行なわれた。南アフリカ、ガボン、カメルーンその他の国々のロータリアンが、会場で、研究所の庭であるいは近辺の海岸で、胸襟を開いて語りあった。

善意の焰を

“私はこの会議から地球を揺がすような大成果が生まれるとは思わないが、ここで燃え上がった善意の焰を高くかかげて、今後おこなわれるであろうこの種の会合への道を明るく照らし出すよう祈るものである”とポーマー会長は呼び

見知らぬ他人として集った人々もたちまち友人に、左よりベナンのアデボー、ザイールのシモン、キンシャサのヤオネー、ベナンのデカンボ、カメルーンのM. ゴーエットなどの諸君かけた。

会議参加者は、いずれも時間と費用の点で大きな犠牲を払ってここに集まった。数千キロの旅をしてきた人もいるし、政府から特別の許可を得てこの会議に来た人、外貨割当やわずらわしい旅行手続きを克服してきた人もいる、だがそれは払うに値する犠牲であった。七つの地区そして三つの非地区グループに属する全アフリカのロータリアンが一堂に会して、親しく話し合ったのは今回が最初である。

モーリシャス首相サー・ラムゴーランは冒頭演説で、国際共同社会を創りあげる必要性を強調し、これは異なる文化を理解し合ってこそ達成されるものであると述べた。

感動的な開会式、そしてこの会議の委員長で



An experiment in goodwill
by Peter Wrinch-Schulz

あり、会議の実現に精力的に努力したM. ラゲス元ガバナーの温かい歓迎の挨拶に続いて、代表団は真剣な討議にはいった。

「ロータリーの第4の部門、国際理解の増進の達成には行動あるのみである」をスローガンにゴードン・バレンタイン元 RI 理事をリーダーとするグループはその具体的な活動方法を探究した。

フランサイス・アモリン元ガバナーをリーダーとする別のグループは、全アフリカのロータリアンが、GSE、ロータリー財団プログラムなどの国際奉仕活動で協力し合う方法を模索し合った。

アフリカ諸国間の障壁を取りこわすもう一つの方法、世界社会奉仕については、E. ジョーンズ元ガバナー主宰のグループがその実施方法を討論し合った。

全アフリカ融合の夢

翌日の会議では、ジョー・ロイドおよびY. ドローへ両元ガバナー主宰のグループがアフリカ諸国間で職業奉仕の推進に協力し合う方法と文化交流発展の道を探り合った。討論はすべて率直におこなわれ、アフリカ諸地域の抱える問題点を活発に論じ合い、その結果、これまで深刻な問題と思われていたものの幾つかが、実は単なる誤解から生じたものにすぎないということが分った。全アフリカに善意と友好を目指すボーマー会長の偉大な夢が現実のものとなりつつあることが、すべての参加者の目に明らかとなったのである。

数多くの重大な問題が討議されたが、参加者は討論ばかりしていたわけではない。余興やホームホスピタリティ、そして会長主催のダンスパーティなどもにぎやかにおこなわれ、参加者同士の親睦を一段と深めていった。

筆者紹介

ピーター リンチーシュルツは、南アフリカ共和国の公式ロータリー地域誌 Rotary in Africa の編集長、北ダーバン RC 会員

またこの日は午前と午後の2回にわたって、参加国の歴史、文化、生活様式などを紹介するスライドが上映された。

世界各地でこの会議を

最終日の日曜日には、フィナーレにふさわしく大パーティが海岸で催された。モーリシャス全土から集まったロータリアン夫妻がホストとなって、土地の料理はもとより、辛いインド・カレー、薬味たっぷりのパキスタン料理、フランスそして中国料理などさまざまのごちそうがふるまわれた。パーティの席上、ケニアから来たロータリアンがザイールの人と住所を教え合い、中国人がウガンダ人と歓談、モーリタニアの会員がブルンディ、モーリシャス、ナイジェリアの会員たちと青少年交換の話に没頭するなどの姿があちこちで見られた。ここでは皮膚の色、言葉そして文化的背景の問題は影をひそめ見知らぬ人々同士がたちまちのうちに友人となっていたのである。会議が成功であったことを具体的に裏付けたのは、この親睦のシーンであった。

だがそれにもまして意義あることは、このような会議を今回限りのものではなく、これからもしばしば開こうという雰囲気が出来あがったことである。1年以内にまた開こうという提案も生まれ、南アフリカのデニス・ロイド地区ガバナーがこの提案を大会最終の会議にはかかったところ、満場一致の熱烈な賛成が得られた。ボーマー会長はこれを非常に喜んで、今後 RI 理事会で検討を要請すると答えた。

このモーリシャス親善会議の後、同じような会議がウルグアイのモンテビデオでも開かれてやはり大成功を収め、他にも同様な会議の開催が検討されている。この種の会議が国際友好の増進に大きな影響力をもつことは明らかで、問題を抱え、対立に苦しむ地域では特に効果がある。

モーリシャスを去るとき、ボーマー会長は、“この会議がロータリーの影響力とその存立の意義をアフリカのみでなく、全世界に拡めるきっかけとなることを期待する”と語った。